



# 近世中後期の村落と村定

—信州高島領乙事村の事例から—

富 善 一 敏

はじめに

本稿では、近世中後期の村落における自治、およびその自律性の内容について、村定（村法）を素材に検討する。村定（村法）を取り上げるにあたっては、それが領主—村—百姓の三者の關係の中でどのように機能し、位置付けられるかの検討が必要であろう。この点に注目して先行研究を整理すると、大別して二つの相異なる見解が存在する。

一つは、戦後の村定（村法）研究の出発点たる前田正治「日本近世村法の研究」、大出由紀子「近世村法と領主権」に代表される法制史側の見解である。<sup>(1)</sup>前者は村法の年次的變化及びその内容の詳細な検討を行い、村制裁に現れる村法の自主性を高く評価し、村法を村の自治的規約として領主法と対置する。また後者は領主法と村法との關係を、村法の成立過程における自主性の限界、効力貫徹過程における領主の村制裁黙認と村による領主刑罰權の利用及び村制裁の自己制限から論じ、村側のアプローチにより村法と領主法が接近し同一体系をなすとする。こうした見解は、村—百姓間で行われる村制裁を重視し、領主との關係において村定（村法）の自主性の表象と評価するものであり、村—百姓間の關係を事実上捨象し、領主法と村法の對抗關係を一元的に論じているのが問題である。

もう一つは、児玉幸多の前田批判、上杉允彦「近世村法の性格について」に端的に示される近世史側の見解である。<sup>(2)</sup>

前者は村法を百姓自ら定めたものではなく与えられたものであり、領主支配権の伸長と評価する。また後者は、五人組帳前書との比較において、村法の内容・形式・運用実態を検討し、村法は領主法の補足・実施細則であり、領主の村落支配の方策と位置付ける一方、それに対抗し個々の条項の改正を行わせ、村政改革により新しい村法を制定する小前百姓の動向を重視する。これらの見解は、村定（村法）が個々の百姓にとって持つ意味を重視し、それを領主法の補完として評価するため、領主―村間の関係を捨象した、領主法・村法と百姓との対抗図式になっているのが問題である。

こうした村定（村法）についての二つの見解の対立は、領主―村―百姓の三者の関係のうち、村が領主・百姓のいずれかに片寄り正しく位置付けられていないためであると考えられる。この点に留意し、村定（村法）の性格を再検討した研究の先駆として、山中永之佑は、「日本近代国家の形成と村規約」において、村定には領主・村役人の百姓に対する支配・収奪手段としての「領主法化された村規約」と、村役人・百姓が領主の権力支配からの自由・解放を志向する「自治的な村規約」との両者が存在し、それぞれ別個の体系をなすことを論じたが、村及び村役人の独自性が捨象されていること、また二つの村規約は別個の体系ではなく、村定の両側面と把握すべき点が問題である。

一九八〇年代後半に至り、近世史の側から水本邦彦「公儀の裁判と集団の掟」、横田冬彦「近世村落における法と掟」の注目すべき二つの論文が出された。<sup>(4)</sup> 水本論文は村における盗みを素材として、公儀―村―百姓三者の関係を「建前」と「内証」に区別し、前者では村は国家の代執行機関（ライトウルギー的義務団体）と位置付けられ、その私的制裁を否定されるが、後者では村は独自の掟を制定し、村内裁判を実施することで領主と対立すること、また公儀と村との関係について、村による公儀の法・刑罰の主體的・部分的「活用」を、公儀が内々に容認することで、両者は相互依存の関係にあると論じるが、村―百姓間の関係が、村側のアプローチのみから説明されているのが問題で

ある。

また横田論文は、近江中野村の近世前期の村掟の検討から、寛文年間に地域社会全体の正義と安全を保障する「公儀法度」が成立する中で、その下での庄屋宛の村掟を公儀法体系の分有と位置付け、領主の支配と中世末以来の惣中の自治の両者が、公儀の下で庄屋による「公的な行政」として統合されたと評価するが、近世中後期との関連性が不明確である。また近年神崎直美は、村制裁の事例を全国的に収集し、その多様性を強調すると共に、領主の村法認識・領主法と村法の関係及び、関東の各国単位での村法の地域性を論じているが、手法及び結論的には前田をはじめとする法制史家の見解と変わるところがない。

本稿では右の研究動向をふまえ、初期と比較してその自主性が去勢され、領主法化したとして軽視されてきた近世中後期の村定（村法）を、単一村落で詳細に検討することにより、領主―村―百姓の三者の関係における近世村落の自律性について検討する。その際、

- ①中後期の村定の大部分を占める儉約村定、長文かつ多岐にわたる「村方取締議定書」<sup>(6)</sup>の再評価
- ②当該期に顕在化する各種の村内外の集団と、村政運営に当たる村役人との関係において村定が果たした役割の二点を課題としたい。また右の考察を通して、中後期の村定の構造についての仮説を提示できればと考えている。

次に対象とする乙事村（現長野県諏訪郡富士見町乙事区）について、その概要を述べておく（図1・2参照）。<sup>(7)</sup>当村は八ヶ岳南麓の標高九八〇―一〇五〇mの高冷地に位置する中世末以来の古村であり、近世期には一貫して、諏訪郡三万石を領した譜代大名高島氏の支配を受けた。その地方制度は、東・西・下三筋の各代官が貢租を、郡方役所が民政を直接支配し、大庄屋等の中間支配機構が存在しないのが特色である。村高は慶安元年（一六四八）の最初の本検地時には二九八石、延享四年（一七四七）には四三七石と増加しているが、いまだ畑地が中心であった（表1参照）。

図1 乙事村地図（現在）

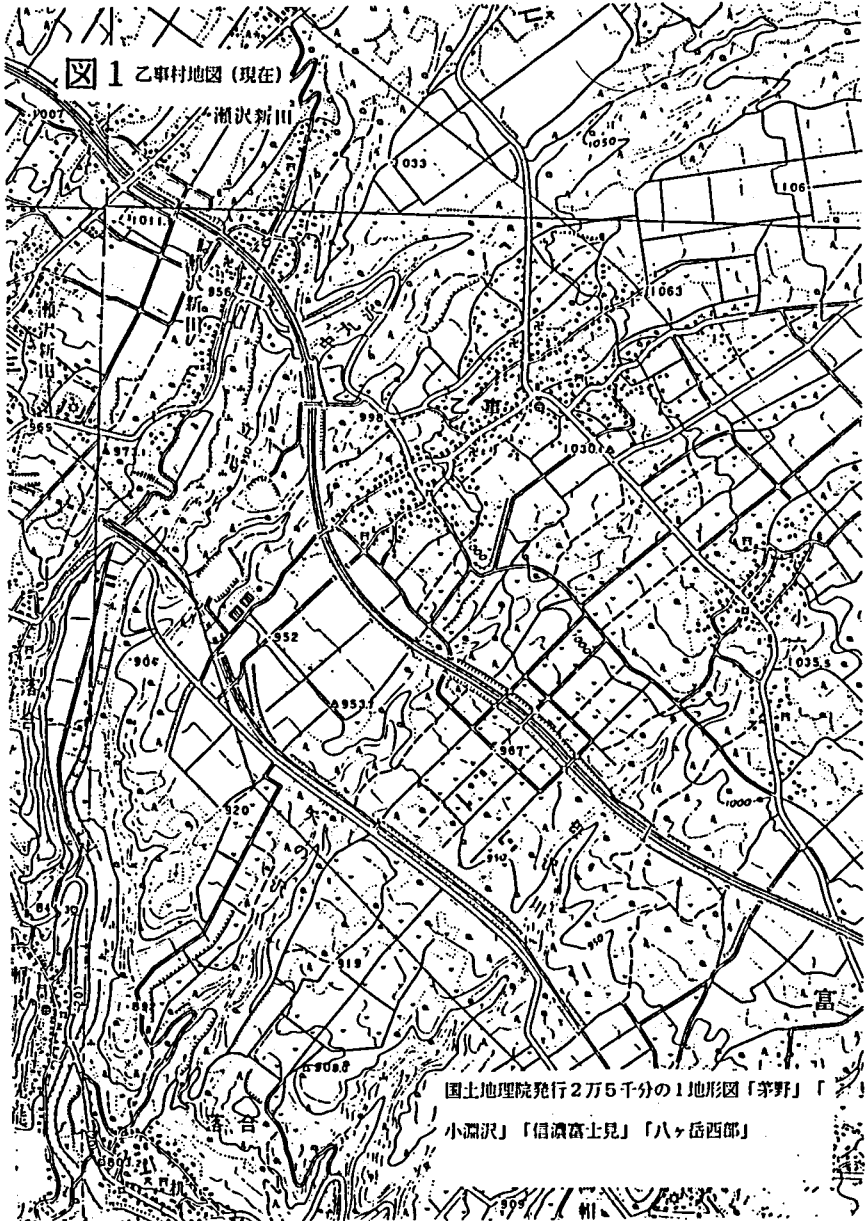
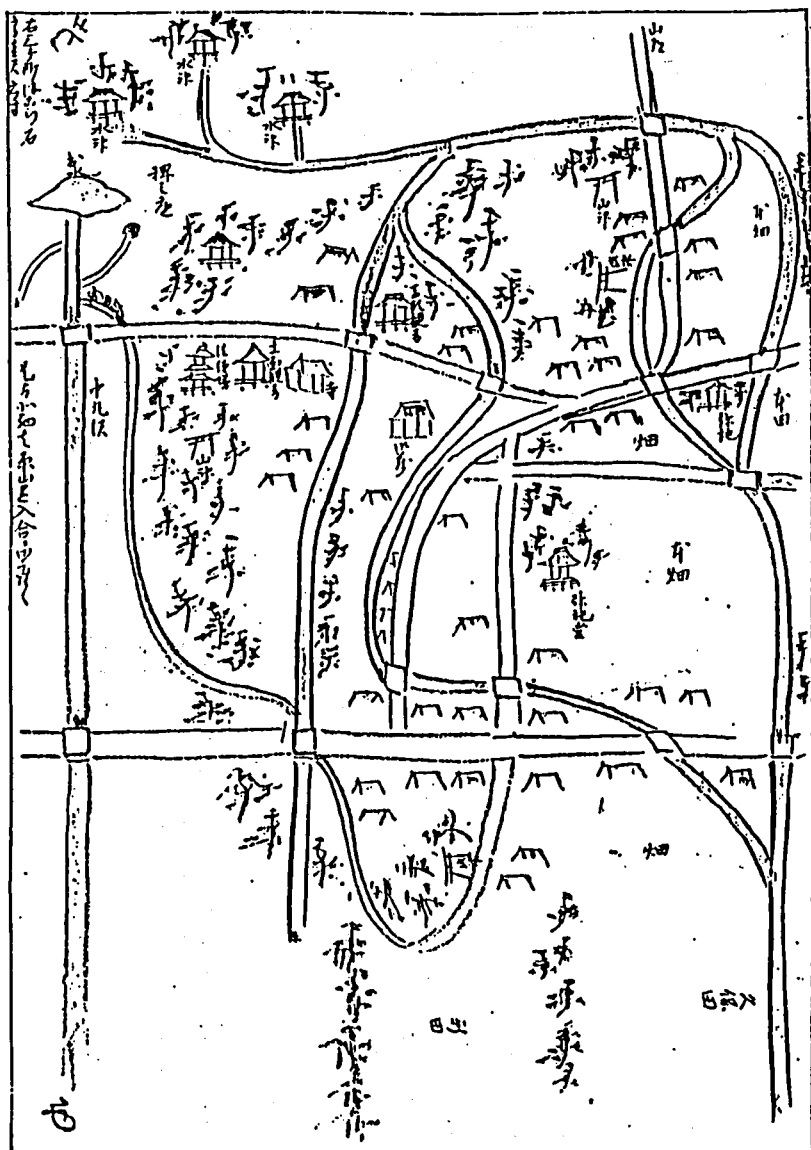


図2 乙事村略図（享保18年）

近世中後期の村落と村定（富善）



諏訪史談会編『諏訪藩主手元絵図』（1985年）

表 1 乙事村土地構成の変遷

年代	検地の内容	田方反別	田 高	畑方反別	畑 高	田畑高合計
慶安元	本検	3町7反8畝12歩	466327石	39町5反7畝 歩	252,2982石	298,7309石
寛文13	百姓改	4 6 16	5,1187	10 4 4 13	62,763	67,8817
享保8	同	2 8 2	30873	1 3 19	0818	3,9053
同 20	林尻新切	4 3 8	56247	5 7 11	6,3103	11,935
延享4	本検	8 9 3 17	104,7506	50 3 7 12	334,9786	437,7292
宝暦11	畑直新切切次百姓改	1 1 1 5	11,1302			11,1302
安永6	新切切次畑直	9 6 9 23	106,9081	14 5 19	84,6953	191,6034
天明6	畑直	3 3 27	0,429			0,429
寛政3	同	2 8 21	3,157			3,157
同 8	新開畑直	7 8 8 21	88,101			88,101
同 9	切次			1 1 6	0,672	0,672
同 11	畑直	1 9 9 27	21,989			21,989
文化13	畑直新開永引起返百姓改	1 1 10	1,1385			1,1385
文政2	高改	記載なし	432,5142	記載なし	217,154	649,6682
慶応2	永引起返百姓改		0,11			0,11

乙事区有文書中の検地帳・検地目録より作成

表2 乙事村戸数・人口変遷表

年 代 (西暦)	延享 4 (1747)	明和 5 (1768)	寛政 8 (1796)	享和 3 (1803)	文化 9 (1812)	文政 6 (1823)	天保 4 (1833)	天保10 (1839)	天保14 (1843)	嘉永 2 (1849)	文久 4 (1864)
五人組 軒 数	70	70	70	70	70	75	213	215	215	220	234
実軒数	104	128	(163)	162以上	224	226	224	223	228	231	230
人 口	780	909	931	943	1002	982	1022	984	983	1038	1030
内 男	433	483	487	490	525	515	528	511	517	548	552
内 女	347	426	444	453	477	467	494	473	466	490	478

各年の宗門人別改帳より作成、なお五人組は文政8年に従来の14組が42組に変更された

表3 乙事村の階層構成

年代 石高	慶安 1 (1648)	元禄10 (1697)	享保20 (1735)	宝暦 4 (1754)	安永4 (1775)	寛政 2 (1790)	文化 8 (1811)	天保14 (1843)	安政 3 (1856)	明治 9 (1876)
30石以上	9	0	0	0	1	1	0	0	0	0
20石以上			0	1	1	1	2	0	0	0
10石以上			3	2	4	5	4	4	3	1
9～10	4	0	0	0	1	0	1	1	0	0
8～9	4	5	0	8	0	0	1	0	2	0
7～8	2	2	0	3	4	2	0	0	1	1
6～7	6	4	1	0	0	2	1	6	2	4
5～6	6	11	5	5	4	3	4	7	9	5
4～5	2	14	5	6	6	7	7	18	13	15
3～4	1	16	17	11	7	18	31	38	41	48
2～3	1	29	39	28	21	46	64	59	67	64
1～2	0	19	52	55	67	82	71	48	53	68
0～1	5	8	26	56	97	53	41	48	58	56
軒数計	40	108	148	174	213	220	227	229	249	262
村持高	293.73	367.16	352.82	419.39	426.59	533.52	614.23	567.64	601.55	603.10

【富士見町史 上巻】779頁

以後安永寛政年間の水利体系整備に伴い、「畑直し」(畑から田への地種転換)、新田開発(「新切」「切次」)が集中的に行われた結果、文政二年(一八一九)には村高六五〇石、うち田高四三三石と、水田中心に転換している。人口・軒数は一九世紀には一〇〇〇人・二二〇軒前後であり(表2参照)、近隣の村々の中では最大規模であった。また当村の階層構成を表3に示したが、この表から中後期の変化に関して、

①享保く安永年間の村高の停滞、名請人の激増による階層分化の進行

②天明く天保年間の村高増加、名請人の停滞による二く五石の中農層の増大(Ⅱ経営安定化)の一方で、一〇石以上の最上層の持高減少による村内の経済的格差の縮小

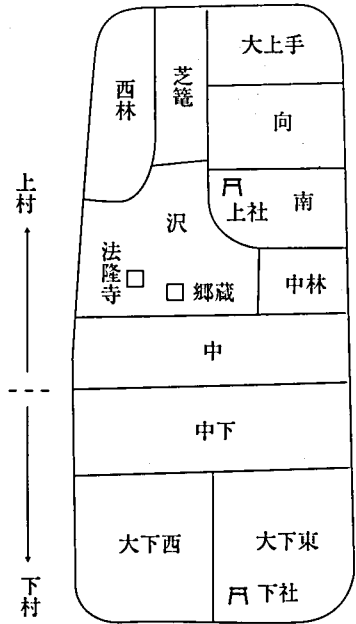
③弘化年間以降の全体的な零細化

の三点が指摘できる。全体的に安永年間をピークとする一定の階層分化はみられるが、極端な対立には至っていない。農閑余業については、水車・紺屋・揚酒屋・棒手振商人・出稼(江戸半季・甲州五年季)・馬喰・中馬が存在したが、紺屋・酒屋・馬喰以外は生計補助の側面が強い。<sup>(8)</sup>

当村には上社・下社という別々の氏神を中心とし、村内を二分する上村・下村という二つのまとまりが存在した。年貢・村入用は両者別々に徴収され、高低差による生産条件の違いから、不作時の年貢の減免率も異なっていた。<sup>(9)</sup>両者の間には祭祀をめぐる常に対抗意識が存在した。延享二年(一七四五)には上・下両社普請をめぐる争論が起きていた。<sup>(10)</sup>また文政元年(一八一八)には寅・申両年の御柱祭を両者合同で行い、御柱を建てる順番を上社・下社交互に先にする<sup>(11)</sup>ことを取り決めた。別々の集団であることを前提としながらも、両者の対等性を尊重しつつ、村レベルでの一体性が保持されていたと考えられる。

また五人組は、上村八・下村六の一四組が存在した。各組内の軒数は六く三〇軒とまちまちであり、享和三年(一

図3 乙事村字図（現在）



に対し、地縁集団として道祖神組が存在した。組毎の道祖神を中心とした上・中・南・沢村・中村・中下・大下の七組が確認でき（図3参照）、近代以降も存続している。

第三に、本稿での考察と密接に関連する村役人制の変化について要約的に述べたい。<sup>(13)</sup> 当村の村役人制は近世中期以降名主二名・年寄四名が相互に交代する年番名主制であり、文政一三年の領主の介入による名主・年寄両筋分離以後も、その実質は変らなかつた。村役人就任者については、延享年間までは旧来からの役家筋が中心であつたが、安永年間をピークとする村内の階層分化の進行による経済的優位性を背景として、その分家が新たに村役人に就任し、寛政末年に至り二〇〜三〇名の村役人グループが形成された。彼らは現在の村役人たる当役と、役人経験者であり当役の職務を補完する古役という集団運営体制を取り、村政運営を行つた。小前百姓も村役人に「御用」「村用」という村落の公共事務を委託し、自らの私的経営に専念するために、多忙な村役人の職務に比して領主からの給分が貧弱なことにより、村役人の交代が相次ぐ状況の中、村役人任期の安定化の基盤となるその生計保障を希望し、村方独自の

八〇三）の家軒図と対照すると、上村・下村は明確に分けられているが、組単位でのまとまりはみられず各方に分散していることから、行政単位としての性格が強いと思われる。<sup>(12)</sup> 各組の組頭は村役人寄合に参加し、年貢・村入用の監査を行つており、小前百姓の代表として村政に関与した。任期は三年であり、村役義のうち郷藏番・火之番・飛脚・汐普請・立場汐水番を免除されていた。これ

増給に同意した。しかしながら天保年間以降の経済的格差の縮小を背景に、村役人入札の有権者が村役人グループとそれに次ぐ中層農民（＝組頭層）による独占から、村内の全ての百姓へと拡大したこと、また村役人給分の増加により経済力の優劣に関係なく村役人への就任が可能となったことから、弘化年間以降これまで村役人を勤めない家筋の者が村役人に就任するようになる。こうした村役人就任者の質的变化、また村政運営に関する村役人グループ内の当役・古役の内部矛盾の顕在化に伴い、村役人グループは小前百姓を統制しきれなくなる。小前百姓は独自の利害を持つ自律的な集団として結集し、村役人交代の決定に組頭を通して影響力を及ぼすなど、より深く村政運営に関与し、その規定性を強めていくのである。

最後に以下の行論の前提として、当村の村定の年次的変化について述べておきたい。当村で独立の文書として作成された村定四九点の年代・表題及び内容・差出・宛所・決定レベルを表4にまとめた。この表から分るのは次の六点である。

①年代的には享保く文化年間ものが全体の七五%を占め、化政期以降に大量の村定が作成されるという全国的傾向とは異なる。

②決定レベル（＝制定主体）は寛政年間を画期として、「村中相談」から「当役・古役・組頭相談」に変わるが、これは当役・古役による村政の共同運営体制の成立を示すものである。

③差出・宛所は、村中百姓または組頭く村役人のパターンが、寛政年間以降当役・古役・組頭差出（＝作成）となり、宛所の記載が消滅する。

④村方仕来書上・儉約村定書上といった、領主への村定書上が寛政年間以降出現する。

⑤水利・入会・林などの農業生産にかかわる村定が寛政年間以降激減し、それに代り村政運営上の細則的な村定（No.

表4 乙事村の村定一覧

No.	年 月	「表題」／内容	差出人	宛 所	決定レベル
1	宝永1.12	「木之落葉刈敷并下草定之事」 私有林と村中入会地の境を確定	十右衛門他1名・ 内林持名代1名	文左衛門他 7名・惣村中	—
2	宝永4.11	「林改吟味加判」／林改は村役人にて 行う。誹謗する者は村八分の制裁	惣村中・奥書99名 連印	村役人	村中相談
3	正徳2.2	「屋作ニ付惣村中連判帳」／家作に付 村役人・村中吟味の上代官へ出願す。 不許可の際村役人を恨まず	十右衛門他110名 連印	村役人	村中相談
4	享保17.12	「今度御かんりやくニ付村中定書之覚 帳」	—	—	—
5	享保20.③	諸事簡略仰せ出さるに付定4箇条 「上葛木へ買田地ニ付印形帳」／上葛 木より買置いた田畑の代金を捻返した いと願った事は無い	権右衛門他41名連 印	村役人	—
6	元文2.2	「下分平百姓判形帳」／下村平百姓が 村役人・組頭・村中相談を破るに付詫び	徳左衛門他61名連 印	村役人・組 頭	—
7	元文2.⑩ 元文2.⑩	「隣村出作ニ付連印帳并村名主給連印」 隣村米大豆物成1升に付銭1文を出し 外村分の年貢諸色の世話を委任	次右衛門他81名連 印	村役人	—
	元文1.10	名主役米を大豆6斗増、合わせて4俵 にする。領主へは増給願は出さず	徳左衛門他61名・ 組頭14名連印	村役人	村中相談
8	元文5.9	「村相談ニ付家作連判帳」／家作諸事 手弁当にて朝五ツ時より日暮れまで働 くこと。違反者は村八分	又兵衛他123名連 印	村役人	村中相談
9	元文5.9	「御年貢引ニ付村中判形帳」／年貢減 免分を上村六分・下村四分に割り当 て。同調しない者は村八分	伝兵衛他121名連 印	—	村中相談
10	寛保2.8	「指出シ申一札之事」／藩からの村役 人給は歩米へ入れ、村役人給は全て村 から出す	組頭14名連印	村役人	村中相談
11	寛保2.10	「御役儀ニ付連印帳」／新筒拔高3石 の内半分は拔高、半分は御役儀寄とす る	村役人6名・組頭 14名・新筒8名連 印	—	—
12	延享1.7	「草間連判帳」／入会村々相談に村役 人・組頭が赴く上は勝手な行動はしな い	組頭14名連印	村役人	—
13	延享4.3	「荒間かやの荒間林ニ付印形帳」 荒間・萱野・荒間林検地を拒否	又兵衛他79名連印	村役人	—
14	延享4.10	「村中管略ニ付定書之覚」 検地が有るので万事簡略、7箇条	組頭14名連印	村役人	村中相談
15	延享4.12	「一札」／検地に付御筆始祝儀分三郎 兵衛持田3畝歩の物成・掛物を氏神料 として永々名主へ出す	名主2名・年寄4 名・地引3名・組 頭13名連印	—	村中相談
16	宝暦3.1	「村中江申渡法度判形帳」／博奕禁止 の領主法度を受け、村独自の罰則を規 定	134名連印	村役人・組 頭	村中相談

No.	年 月	「表題」／内容	差出人	宛 所	決定レベル
17	宝 暦 3	「上葛木宿 御伝馬銭懸ケられ申候ニ付印形帳」 上葛木との争論で江戸出訴となっても費用は負担	長左衛門他57名連印	村役人	—
18	宝 暦 4.1	「村中相談田水連判帳」 当年の田用水の遣い方を規定	又兵衛他157名連印	—	村中相談
19	宝 暦 4.3	「村談議定之事」 田水余り水・新切畑直し分に付3箇条	村役人6名・組頭14名連印	—	村中相談
20	宝 暦 5.3	「従御上様被仰付候付不忠不孝村中水夫相談判形帳」 不忠不孝の者藩へ注進。畑直し・水夫(使)に付3箇条	武右衛門他174名連印	—	村中相談
21	宝 暦 5.3	「村中願之事」 村役人の水役・御借用を村中で上納	組頭14名連印	村役人	—
22	宝 暦 10.6	「新切切次畑直し御改ニ付村中連判帳」／田方・畑方共書上の他に新切・切次・畑直し一切なし	又兵衛他176名連印	村役人	村中相談
23	宝 暦 14.3	「寺江田地金相渡シ申答連判帳」／金13両余・銭372文・田3筆寺へ渡す	名主2名・年寄4名・古役10名・組頭12名連印	—	当役・古役・組頭
24	明 和 6.3	「村談議定之事」 乙事沢尻田水を西林へ引入れる件	村役人6名・組頭14名連印	—	—
25	明 和 7.10	「添証文之事」 寺田には乙事沢尻田水千水の節は通水せず	当役人6名連印	—	村中相談
26	安 永 6.9	「八ヶ嶽山出入ニ付村中連判帳」 小淵沢村と山論に付費用指図次第出金	助六他197名連印	村役人	—
27	安 永 6.11	「一札」／新切畑直し検地に付御竿始祝儀分長兵衛持分下々田4畝歩の物成を氏神料として名主へ出す	名主2名・年寄4名・地引2名・組頭14名連印	—	村中相談
28	天 明 7.8	「村定連判帳」 儉約の仰せ付けを守る。6箇条	助六他205名連印	村役人	村役人・組頭
29	寛 政 4.3	「御儉約書上帳」／儉約に付藩から仰せ付られた箇条と村で定めた規制。違反者は過料。17箇条	名主2名・年寄4名連印	郡奉行所	—
30	寛 政 8.11	「村定之事」／名主半年交替。名主・年寄給分及び割合方法。8箇条	名主2名・年寄4名・組頭14名連印	—	当役・古役・組頭
31	寛 政 11.2	「村中申合儀定書上帳」／古来村方定書書上27箇条と今度申付けの儉約12箇条	名主2名・年寄4名・古役21名・組頭惣代4名連印	郡奉行所	—
32	享 和 3.3	「無尽并徳者借御停止御触書右之外於御役所被仰付之趣村中定書帳」／藩からの触達の趣承知	—	—	—
33	文 化 3.1	「村中申合儀定書留帳」 儉約。28箇条	組頭横目2名	—	—

No.	年 月	「表題」／内容	差出人	宛 所	決定レベル
34	文化3.7	「御上様御出之節御仕法ニ付定書帳」／藩主御出、家老、家中鷹狩等の節費用・人足負担の取り決め	—	—	—
35	文化6	「古来5村方仕来之箇条」 村方仕来書上。38箇条	—	—	—
36	文化7.3	「役人世話役増給談義定書」／名主給分増給を藩へ願い出。不首尾の場合村内限りで増給	組頭14名連印	—	当役・古役・世話役・組頭
37	文化9.4	「村中議定印形帳」／関屋屋根郷林伐潰し・村役人批判等に付村中を糾し古来よりの仕来確認	組頭16名連印	名主2名・年寄4名・古役23名・託人2名・世話役3名	—
38	文化9.10	「里方拾貳ヶ村無尽ニ付連判帳」 無尽掛金10両の出金配分	名主2名・年寄4名・世話役3名・古役25名・組頭14名連印	—	当役・古役・世話役・組頭
39	文化11.11	「当役人古役人組頭連印帳」 立場川下汐水論に付他言せず	名主2名・年寄4名・古役惣代10名・古役14名・組頭14名連印	—	—
40	文政初	「毎年宗門内改之節申渡村談之覚」 諸事取締条項。42箇条	—	—	当役・古役・世話役
41	文政1.7	「熊柳柳原式ヶ所郷田開発定書之事」 郷田収益の使途	名主2名・年寄4名・古役惣代6名・組頭14名連印	—	当役・古役惣代・組頭
42	文政2.12	「取替証文之事」／五味林・阿弥陀尾根無年貢地に付村中入会、冬中のみ落葉掻き取ること	両字土地持惣代各2名	組頭	—
43	天保2.1	「従古来村方仕来書上帳」／文化6年「古来5村方仕来之箇条」に加筆修正	名主2名・年寄4名	改方役所	—
44	天保2.1	「村談儉約書上帳」／天保1年2月～同2年1月の儉約村定の集成	名主2名・年寄4名連印	改方役所	—
45	天保2	「村定儉約書留帳」／文政8年8月の儉約定26箇条及び天保1年2月の儉約定17箇条	組頭	—	—
46	弘化3.10	「氏子中定書覚帳」御湯立蒨堀未進人代銭等	下村中氏子世話人	—	—
47	嘉永4.2	「村定儉約之ヶ条」／祭日は男女ともに農桑留、郷田外9箇条	—	—	当役・古役・組頭
48	明治6.3	「村規則記」／村史三役廃止に付日待組11組より役場助役として伍長11名選出、他6箇条	—	—	村中相談
49	丑年10 (享保18カ)	「村中判形帳」／隣村当村共林下草刈取の節、もや木伐取の際の制裁を定める	又左衛門他120名連印	—	村中相談

乙事区有文書より作成。「年月」の丸数字は閏月を示す。

「富士見町史 上巻」740～41頁所収の表を一部加工。

38など）が出現する。

⑥制裁は村八分から、宝暦年間以降「過怠」に変わる。

全体的に寛政年間を画期とする村定の変化がみられるが、この理由については二で検討することとし、以下本論に入る。なお本稿で使用する文書は、特に注記しない限り長野県諏訪郡富士見町乙事区有文書である。

## 一 儉約村定と領主・村

ここでは領主―村間の関係について、領主の儉約触と儉約村定を比較し検討する。

### (一) 儉約村定の概観

表5は、表4のうち儉約村定のみを抜粋して、その制定理由・制裁・特徴をまとめたものである。この表から、次の二点を指摘しておきたい。

①制定の契機は大部分が領主の儉約触であり、領主への儉約村定書上もみられるが(D・E・I)、村方独自の課題に基き定められたものも存在すること(B・H・J)

②制裁はおおむね過怠又は過料銭であり、犯人摘発のための入札も行われること(B・C)

またこの表に掲げた儉約村定の典型として、文化三年(一八〇六)正月一八日付の「村中申合儀定書留帳」(G)の全文を、左に掲げておく。

【史料1】(傍線は引用者が付した)

村中儀定書

表 5 乙事村の俵約村定

記 号	年 代	表 題	制 定 理 由	制 裁	備 考	条数
A 4	享保17.12	今度御からりやく二付村 中定書之覚帳	領主の俵約触	(記載なし)	祝儀・振舞の規制、家作条項あり	5
B 14	延享4.10.15	村中管略ニ付定書之覚	本候地を儀に村中相談	入札・通意 (7条違反のみ)	制裁条項初出	7
C 28	天明7.8	村定違判帳	領主の俵約触・俵約村定制定 命令	俵約触違反の際は御定め、 この村定違反には 300 文の、 秋作荒しの際は 500 文の過料 銭	犯人捜索のため入札を行う、山盗・ 畑盗条項が中心、若者提制初出	6
D 29	寛政4.3	御俵約御書上帳	前年の御借用2割用捨・俵約 触	過料銭	領内一門の俵約村定調査を受けての もの、領主への村定書上初出	17
E 31	寛政11.2	村中申合儀定書上帳	前年の道祖神祭の際太神楽・ 獅子舞を行い領主より叱りを 受け、村方風俗引き締め	(記載なし)	村方仕来書上29条の内19条は文化 6年の仕来書上 (No.35) に継承、古 役対領主文書に初出	41 (内後 約12)
F 32	享和3.3.1	無尽井惣者借御停止御触 違行之外於御役所被仰付 之趣依之村中定書覚帳	領主の俵約触	(記載なし)	同年2月付の無尽・惣者借停止、在 町に行く藩役人への馳走・酒振舞禁 止令+郡方役所での諸事取締申渡+ 俵約条項の構成	7
G 33	文化3.1.8	村中申合儀定書留帳	前年2月の村入用ニ付領主触	通意 (見送・間違の者も同断)	「組頭横目」2名がこの村定の遵守 を監視、史料1	27
H 45	文政8.8	定	当年の凶作	(記載なし)	他村からの滞在者に対しても適用	25
I 44	天保2.1	村談俵約書上帳	俵約村定制定・報告命令	(記載なし)	村方での俵約申渡5回の内4回が俵 約触に对应 (表6・7参照)	計45
J 47	嘉永4.2	村定俵約之々条	村方独自に湯酒屋の営業停止	(記載なし)	宗門人別改の際村中百姓へ読み聞か せ	9

出典は表4に同じ

一 御上様へ対無礼等一切仕間敷事

一 宗門御改之場所たば粉一切無用ノ事、御改ニ参り近所之家へ立寄申間敷事

一 宗門・大検見之節、村中者勿論屋敷・家内迄そふじ念入、火之用心第一ニ可仕候、御改ニ参り留主ニ居候者、隣

家江罷出間敷事

一 孝行之者有之候ハ、早速可申出事、不孝之者ハ猶又可申出候

一 諸御役儀ニ参り候節不働致候者ハ、村方ニて過怠申付候

一 酒一切村方ニ而為売買不申候、尤祝儀又者不幸之節者、役人へ願出分限ニ見斗ひ申付候所、此末ハ組頭・親類・隣ニて差積り、其上名主元へ願出可請差図候事

但シ其節家ノ内ハ外へ一切酒出間敷事

一 外ハ酒商人参り候共一切買申間鋪候、右之趣相背候ハ、吟味之上過怠申付候、近村へ出候共買給候事、是又無用之事ニ候

一 祝儀之外酒樽并雜事等遣り貰ひ不致咎

一 呼合之儀親子之外一切不仕候、重之内右同様ニ候

一 農着物者男ハ一統青、女ハ青ニ形ニ可仕候、其外之儀ハ分限ニ可応候、尤不相応成衣類着用致候ハ、其組ニて吟味可仕候

一 女中かんざし沓本ニ可仕候、白きひら元結斗り、其外ハ何ニても無用ニ候

一 女中ろう・かんばり并島田入共二分限ニ応シ可申候

一 前だれ鳥類一切無用ニ候、古キ有合之外、此上仕立候ハ、青ニ可致候

一帯・衣類男女共ニ綿布之外、袖口・半ありにても一切無用事

但シ祝儀・不幸之時、内々ニて分限ニ応シ着用可仕候

一農笠之儀ハ役人見斗ひ相渡筈

但シ他所へ出候節分限ニ応可申候

一手履之儀麻ニて秋斗り用捨之事

一は、きも麻ニて田植斗り用捨之事

一村中一統わらそふりニ可仕候、買候事は又無用ニ候

一下駄之も右同様ニ候、然共分限ニ応シ可申候

一男女足袋之義是ハ買申間敷候、手前ニて拵可申候

一たばこ道具村ニてさげ類無用ニ候

一からかさ奉公人并小供等無用ニ候、其外茂分限ニ可応候

一髪目代三人とも寄合致し申間敷候、寄せ候事無用ニ候

一若者夜遊ニ罷出泊り候事無用ニ候、猶又留申間敷候事

一山帯ハ青ニ可致候

一女中衣類裏形者一統無用ニ候

但縁付候節ハ分限ニ応可申候

一わらじ沓軒ニ付沓足ツ、毎月晦日ニ組頭へ差出シ可申候

右之外ハ前方申渡候通

右之通相背候者有之候ハ、不依誰急度吟味之上過怠申付候、見のがし・聞のがし候者有之候ハ、当人同様ニ候

寅正月十八日

組頭横目

利右衛門

七郎右衛門

(二) 儉約触と儉約村定

ここではまず、儉約村定についての領主の言及をまとめた次の史料を検討する。

【史料2】

(a) 一衣服・飲食等ニ至迄常々儉約を用、農業無油断可相勤事

附 農具之外いらざる器物相調ましき事

(元禄8年6月「高島藩郡中法度」「長野県史近世史料編第三巻諏訪地方」五二頁)

(b) 其外巨細成儉約之儀、又者村町為ニ相成候義者、役人共長百姓・小前之者迄申談、諸事儉約ニ可仕候

(天明7年、表6ろ)

(c) 其外下着・帶等之類、懷中之品・草履・木履等細か成品ニ至迄精々儉約ニ致、一切為用申間敷候

(寛政3年、表6は)

(d) 近年身分不相応成衣類等を着し候者有之者、村役人吟味可致候、其外村方ニ而儉約之儀者村役人嚴鋪可申渡候

(享和3年、表7F)

(e) 一諸事村定之儀并儉約向之義、ケ条之外村方ニ而尚又巨細ニ相定、帳面ニ相記可申出事

この史料から、領主の意向は、儉約触の発布の際村に儉約村定を制定させ、かつその内容を報告させ把握することにより、儉約触の細則及びその効力貫徹手段として利用することとまとめられる。

これに対し村は、表5に示されるように儉約触を契機として儉約村定を定めているところから、基本的には領主の意向に従ったものと考えられる。しかしながら、村定は本来村を主体として作成され、村内の百姓に対して機能するものであり、ゆえに村の独自性を反映した内容であるはずである。次にそれを検討しよう。

表6は、表5に掲げた儉約村定に対応するか、あるいは同時期の儉約触の内容をまとめたものである。また表5の個々の儉約村定の内容を、表7にまとめた。以下表7の分類をもとに、表6と対照することで、両者の内容の比較を行いたい。

# 1. 衣服

・ 農着 男は青、女は青に形付が共通してみられる。G以降手覆・前垂れ・「はきも」などの、農着の色・農笠にとどまらない細かな仕事着の規定が出現しているが、儉約触には全くみられない。

・ 着物 領主触は一貫して絹布着用禁止を定め、村定でもこれを受け同様の条項を定めているが、祝儀・不幸時には「内々」でその着用を許可している(史料1傍線部分)。これは、ハレの際には平時の木綿・麻ではなく絹を着用するという村方の慣例が領主触に優越していることを示すものであり、注目される。

・ はきもの・小物類 領主触は贅沢品、とくに女性の櫛・簪・簪の使用を特に厳しく制限している。村定も同様の条項を定めているが、「分限相応」と一般的な表現にとどまり、概して前者の方が詳細である。

以上の検討から、村定にみられる衣服条項は詳細な領主触の再令といった性格が強いが、農着の色について村内の

表 6 高島藩侯約款の内容

項目 表題	い 延享4年11月「御公儀へ被仰付ニ付御符 略村中江申渡し銘々印形帳」	ろ 天明7年「(後約款)」	は 寛政3年12月「御借用式制 御用符御侯約被仰付候村中 印形帳」
衣類	百姓・町人の衣類は羽織・帯・頭巾・袖口に至るまで木綿着用品、絹布・絹の使用禁止 (1・2) 百姓・町人の帯・袴は絹または木を使用 (3)	・身上宣言(御目見・問屋・町役人・苗字御免の者も同様) 妻女は平日着物は帯まで絹使用禁止 (1) 妻女・寺参りより外出の際は太鼓・片絹・糸入袴着用許可、夏物の晒切着用禁止、袖以下の品は着用許可 (2) 下着・袴袴・半袴・袖口には目立たない相使用許可、帯・腰布も同様 (3) 櫛・簪は平日には粗末な物を用い、特別の際も金銀・べっこう・象牙は禁止、水牛以下は許可 (4) 男子は下着・帯・頭巾などに絹着用許可 (5) ・並殺以下の者 妻・子共に衣類・帯・袖口・頭巾まで木綿着用許可、絹布使用禁止 (女のかぶりものに絹使用は許可) (8・9) 70才以上10才以下の者は、振舞時には下着・袴袴に限り相使用許可 (11) 絹は金銀・べっこう・水牛・象牙全て禁止 (11) 履物も實設備品使用禁止 (11) 日傘使用禁止 (小児は除く) (11) 御用同文は祭礼時絹布着用の際には藩役人に申し出て指示を受ける (12)	絹布着用一切禁止 かんざしは1本のみ、差御使用禁止 その他の下着・帯・櫛中の品・草履・下駄などは侯約を専らにする こと
祭礼・仏事	雛人形は紙雛または土人形に限る (6) 布小櫛使用禁止、紙小櫛を用いる (7) 櫛・相模は費用のみからしないように行う (9) 招き籠禁止 (寺で建てるのは許可) (8) 野送り・仏事の露多敷の参集禁止 (10) 奉加・勧進一切禁止 (11)	同左 (21) 布小櫛は一布、男子1人に限る (22) 同左 (24) 諸祭礼・問屋・仏事の祭新規の燈籠禁止 (寺院含) (15) 同左 (25) 御住持祭礼時新規のなり物出し禁止 (16) 招礼・祝儀の際親類・仲人以外人呼禁止、料理は一汁一菜、肴は三輪のみ (17) 酒盛禁止、酔倒は粗末な物を用いる (18) 正月水祝禁止 (19) 妻の神飾りは軽くし、近祖神祭の際狂言禁止 (20) 同左、また天井・板敷・張付のある家軒の書上を指示 (13)	同左 (14) 博奕禁止、招の者は特に重罪 (28・29) 仕事先ない者は村役人・古役が認識し就業させる (30) この他に違反の者は物品没収の上、当人・名主・問屋各1疋文、年寄 500文 (小村・新田は名主 500文・年寄 300文) の過料銭没収 (後書)
家作	新租の家作・建て直しは元の家族より大きいもの禁止、天井に板を張る場合は郡奉行・司奉行に同意、指示を受ける、天井・板敷のある家の軒数を改め、新風の家分・修理・天井・板敷替え禁止 (4)	同左 (14)	
その他	誰によらず音信・問答一切禁止 (5)	同左 (14)	

扱置は勿論新租などに至るまで一葉のみ

文政13年正月19日「題文」	文政13年3月4日「宗門改の祭大目付より申渡」	文政13年10月「御役約中と渡渡御付二付村中印形帳」	天保元年12月「改方役所村町中付背子帳」の内「儉約之ケ条」(ケ)と「停止之ケ条」(チ)
儉約については是迄の條を守り、着用品は目立つもの禁止 (3)	男女とも着用品は木綿・麻以外禁止 (2) 女の頭飾り着用品禁止、御柱祭時も着1本・袴1本のみ (2)	姉・妹・姉・社参・仏詣の際、下着・腰帯・頭巾・袴袴・半着・袖口に至るまで、絹布・糸着用品禁止 下駄・裏付駕籠使用禁止 日傘使用禁止 (子供は可) 雨傘は白装を用い、法・蛇・目女は着1本・袴1本の着用品可、べつこう・朝顔・ガラクタは禁止、その他の被中物・提物・植草入・煙管などに類使用禁止	着物は男女とも上下・袴・羽織・帯・腰帯などを全て木綿・麻に限る、祭礼・凶事・社参・仏詣の際も同様、絹布着用品禁止 (70才以上10才以下の者は許可) (ケ1・2・7・9・11) 振袖着用品禁止、上下は特別の場合のみ許可 (ケ3・5) 合羽・頭巾も木綿・麻に限る、相賀使用禁止 (ケ4・6) 祭礼・盆踊の際、木綿・麻でも薄いの着物または目立つものは禁止 (ケ10) 雨傘・日傘 べつこうと同じ (ケ15・16) 被中物は身分相応のものを用い、短袴・短袴袴禁止 (ケ14) 女の脚は 袴は高麗のものを用い、襦は本甲・てうせん禁止、木綿は可 (ケ12・13) 下駄・裏付駕籠・草履は粗末なものを用い、塗下駄など高麗なものの禁止、鼻結などくに相使用禁止 (ケ17) 村役人・特別の者以外類着用品禁止 (チ4)
祝席時でも酒一切禁止 (3)	村々の小宮神社等は、古来の儀を守りなるべく儉約し、男・女・足・衣類・手拭など兼及一切禁止、飲酒は前日・当日のみ許可 新規の道徳禁止	嫁人・着子遣しの際、結婚の品は鞋き物にする、嫁入客相きは近親・同家・「無縁者」に限りなるべく略す、食事は一汁一菜のみ (ケ19・20) 祭送を飾き、祝儀・仏事などの際酒一切禁止、肴は一品のみ (ケ21) 寺社・山伏を招く際酒一切禁止、食事は一汁一菜のみ (ケ22) 郡中・一城5年間「二人と寄合」飲酒一切禁止、当役・古役・組頭寄合の際酒禁止 (チ1・2)	嫁人・着子遣しは近親・「無縁者」以外はなるべく省略 (ケ23) 産着遣しは祖父母のみ、水祝・泥あせ禁止、節籠は土人形に限る、布小袖は1布にし、1軒1本のみ、飾袴・吹流し懸禁止、風は海月のみ (ケ24・27・30) 祭礼・祝儀・風鈴・風鈴・風鈴・風鈴・厄神祭などはなるべく賀姿にする (ケ31) 歌舞・狂言・あやつりを行うこと禁止、物真似・太神楽・子供囃し同様、盆踊の狂も他村へ行き踊らない (ケ9・10) 村々にて掲酒屋・居酒屋一切禁止、往還訪・諏訪神社周辺・湯治場は許可 (チ6)
村々歩割 (村人用) 改めは、今後三之丸 (家老・千野氏) 屋敷で行う (1) 頭は藩役人の私宅で受け付す、その際の役所へ申し出る (2) 着物は干物・類以外持参禁止 (4)	博奕・小遊の者は厳しく改める (4) 目付を前日に廻付させ、この申付に違反する者は召し捕り時味する (6) 歩割を正しく行い、内宗門改の礼物は干物・類以外禁止 (8)	伊勢神宮の祝礼降り二付、おかけ参りを規制	博奕・賭博・賭け一切禁止 (チ8) 吉米にない信心事を金で、風流講・御講と見し加特所特禁止 (チ11・12) 目付が役人を前め直さ、「芝術精吉」をすること禁止 (チ3) 他所者の借取、逗留禁止 (チ13・14) 田畑をつぶし桑を植付けすること禁止 (チ15)

い・は・へは乙事村有文書、ろは「宝暦二中年と文化三寅年迄御家被仰付」(岡谷彦糸博物館所蔵)、ほは「乙事村万代記」迄土見、五秩村家文書、には「御題状写帳 下」(諏訪教育会蔵「諏訪史料蔵書」第6巻)、とは富士見町平岡区有文書。なおろ・は・とは長野県史料刊行会採録の写真版を使用。また各項末の( )内の数字は各箇条の番号である

表7 乙事村儉約村定の内容

項目 表題	A 享保17.12.23 「今度御かんりやくニ付村中定置之儀帳」	B 延享4.10.15 「村中管轄ニ付定置之辻」	C 天明7.8.1 「村定通判帳」	D 寛政4.3.15 「御儉約御寄上帳」
農業者		堂は並堂のみ (6)		農者は袴を用い、青色に染める (3) 女の農者は「野二形」にする (4) 男女とも農堂は伊奈堂のみ (6)
衣服小物類	振舞は親子以外禁止、他へは春夏秋冬はもろなる人形物まで無用 (2) 本祝以後禁止 (3) 嫁取・婿取共に村内では客を呼ばない (4)	奉公人・日用取・人の息子は頭巾・はうかぶり・絹袴着用禁止 (5) 分限に應じ染物禁止、並染のものを着用 (4)		「女おび着入條」は禁止 (5) 草履は粗末なものを使用 (7) 雪踏は使用禁止 (8) 鍵木履・腰緒使用禁止 (9) 傘の使用は分限相応 (10) 襦袢の使用は分限相応 (12) 染色は分限相応 (2)
儀・葬・葬・葬		親以外の親類・兄弟への振舞は年内秋1度のみ (2) 四屋以外「振茶」一切禁止、「汲茶」にする (3)		呼び呼ばれは親以外一切禁止 (4) 節句・祝・不幸の際「重二而くばり焼義」一切禁止 (15・16)
酒		焼酎あるいは他所より借物に至るまで、祝旨・懸歌以外一切禁酒 (1)		酒一切禁止、どうしても買う場合は村役人へ申し出て差函を受ける (11)
若者			若者なりとも其遊・夜泊禁止 (5)	
家作	(建て替えた古家の)「ばうち」・古置・古なる木などを持ち帰ること禁止 (5)			家作をする者が甲以下の場合には(手伝いの者には)并針を一切出さない (18)
端・日持月待				日持・月待などの當合時は水風呂のみ (17)
食事				
その他		日用取・奉公人の子供に限らず、乱暴をし親に不孝の者は入札の上通返申付 (7)	栗は落ち次第拾い、石打ち禁止、林荒らし・小枝取り取り禁止 (2) 取付の神・大立など秋作のものの盗み犯し禁止 (4) 夜中不時の鳥声・鶴交禁止 (5) 胡蝶は前々通り自分で落としてても可 (6) 禁止区域での草刈禁止 (7) 今時の儉約申の違反者は、村役人の分まで御定の裁料税を出す (1)	

E 寛政112「村中申合儀定書上帳」	F 享和3.31「無良井徳者借御停止 御風音(中略)彼之村中定書帳」	G 文化3.118「村中申合儀定書留帳」	H 西(文政8)8月「定」
<p>「是者は男は吉、女は吉に形にする(31) 農家は男女とも伊奈幸・大熊幸(32)</p>	<p>「是者 E31に同(3) 農者 男女とも「わが三度」は吉い物 でも禁止、竹のかわきは三度でも安価 なものは許可(4)</p>	<p>「是者 E31に同(10) 農者 役人が見計り渡し、他所へ行く際に は分限に応じる(15)</p>	<p>「農家 D6に同(19)</p>
<p>「変化は分限相違(30) 女性の振袖に至るまで粗布着用品禁止 (34)・振袖・切着品(35) 農物は分限相違のものを使用、日用取 扱月代を3人以上で揃えること禁止 (37)</p>	<p>分限相違の物を着用品・相違な物着用品 の場合分限相違・取扱いで別(33)・ 元結・よしの紙などは禁止(5)</p>	<p>衣箱・一般 F3に同(10) 女性の「ろこふかんぱり島田入」は分限に 応じる(12)・粗布使用禁止、色は青(13) 袖口・半端でも男女とも粗布着用品可 (14) 不幸時には内々で分限に依り着用品 手拭は麻を用い秋のみ許可(16) はばき もは麻を用い田植時のみ可(17) 村中一統農具を用い、腰入禁止(18) 呼合は親方以外一切禁止、重の内二面入る ことも同様(9) 祝儀以外酒・雑事やりとり禁止(10)</p>	<p>種草入れ「立派な農物」は一切禁止(18) 粗布使用禁止、但し分限に依る(3) 女性着用品は1本のみ(12) 前垂は留・裾がすり着用品禁止(13) 祝儀・惣敷時以外、男が前垂を付け遊び歩き、農 作物は着の木細又は麻に限る(15) 農物はなるべく便所(16) 家は分限に依る(17)</p>
<p>「不幸の際には着物を着さず、否代とし て20文を互いに遣す(20) 呼合は親方以外一切禁止(28) 「重之内二面儀便事」は親方以外一切禁 止(29) 祝儀の際は一行一案のみ(38)</p>	<p>呼合 E28に同</p>	<p>祝儀は分限に依りなるべく便所(5) 祝儀以外酒・雑事やりとり禁止(6) 呼合・重之内 G9に同(7)</p>	<p>祝儀は分限に依りなるべく便所(5) 祝儀以外酒・雑事やりとり禁止(6) 呼合・重之内 G9に同(7)</p>
<p>「酒は村方二面一切おわせず、祝儀・不 幸の際には村役人へ願い出た上、村役 人が分限を見計り申付(19)</p>	<p>同左</p>	<p>外より酒類人が来ても酒買一切禁止、違反 者は吟味の上酒意申付、近村へ行き酒買・ 飲酒禁止(7) 祝儀・不幸時に酒買の場合は細頭・親類・ 隣家で差取り、名主元へ申し出意図を受け る。その際家外には酒を一切出さない(6) 若者が夜更けに出て(他家へ)泊まること、 若者を泊めること禁止(24)</p>	<p>惣敷時、酒をその家の火口に出すこと禁止(10)</p>
<p>「手伝人足の食事は分限に依り役人が差 図、不如意者の場合は一切出さず(22)</p>			<p>手伝に頼んだ人には往儀のみ出し、酒出し禁止 (8) 音頭見舞は茶のみ、茶菓子は親類・隣家以外禁止 (9)</p>
<p>「11時・月時は年2回のみ、折額以外の 客時禁止(23)</p>			<p>山神講・二十三夜講など、世情回復まで食事禁止 (11) 十三夜餅は焼餅禁止、餅餅にする(25) 食事は茶・野菜を混ぜ、粗飯を用いる、伝馬・諸 役者、召使男女も同様(2)</p>
<p>「伝馬役に行く際は弁当に差入(39) 草 刈の者の弁当には野菜を入れる(40) 凶年の際の大食手当として、米を2 升・1升3合・1升の3ランクに分け 年々異なる(41)</p>	<p>宗門改の場所では酒類禁止、改に行く際 近所の家へ立ち寄り禁(6) 道場・屈 家内まで掃除を差入れ、火の元第一 に心得、改の際留守番の者が隣家へ通 ひに行くこと禁止(7)</p>	<p>領主へ無礼一切禁止(1) 宗門改(2) 大検見の際に得 奉行者・不孝者は申し出ること(4) 詰問役に出た際不馴の者は村方より意図 わらじを1軒二付1足ずつ、毎月晦日に租 頭へ差し出すこと(27)</p>	<p>非人・物買・諸町通に同じ禁止(4) 川田取の者は舟回りに金を付ける(20) 他村よりの諸在者も当村の定を通出(21) 物買(22) 遠足・防犯・山伏・社人止宿禁止、違反者は租頭 より通付徴収(23) 乗客しは行分科以外禁止、水は新荒し禁止(24)</p>

I ① 文政13.26 「村談條約申渡」	I ② 文政13.33 「村方定例人罰内改之節禁」	I ③ 文政13.34 「宗門改の節村方へ申渡」	I ④ 文政13.10.4 「村談」
<p>農者 E31に同(2) 農並 D6に同(3)</p> <p>裁着手廻 H15に同(4) 女性替 H12に同(5) 絹帯は袷・惣敷時分限に依じ着用(13) 女性の前髪は黒又は安曲を編木綿、色は青か花立に限る(17)</p> <p>呼合・重之内 G9に同(7・8) 当才馬出生時七夜祝に酒客を呼ぶこと禁止(9) 人馬和氣時五人組 隣家を頼み神仏祈念の節道長禁止(10) 酒やりとり H6に同(15)</p>	<p>下着・半纏・帯・袖口・羽織の裏 紐合切の裏まで袖布着用禁止、木綿でも立立つ物は禁止(2) 女の裏縫りに相類使用禁止(3)</p> <p>婚礼時終別の料理禁止(6) 不幸の際近村より見舞の入たりとも迎飯出禁(9) 不幸の際断部は一計一業(10)</p>	<p>祝儀でも酒一切禁止</p>	<p>玄關・下駄立立つ物使用禁止(6) 足駄及び木履の木屐皮、青染塗の紐で立立つ物禁止、口黒皮紐で足迄使用し致女の物は許可(7)</p>
<p>不幸時酒買 G6に同、穴細堀へは少々違す(11)</p>	<p>飲酒禁止、神酒たりとも手樽1つに限る(5) 婚礼等どんな祝事でも酒買禁止(6) 不幸の際酒買禁止、穴細堀へは2升違す(7) 提酒屋の名へ居酒出し、村方への酒販売禁止(11)</p>		<p>村内の提酒屋一切禁止、他村の酒商人が入らないように村入口の諸方に札を建てる(1)</p>
<p>若き男女が休日往來道筋へ出て遊ぶこと禁止(6)</p>			
<p>手伝 H8に同、また屋作昔節・蔵昔節の際押懸手伝禁止(12)</p>			
<p>H11・25に同(16・18)</p>			
<p>H2に同(諸職人・日雇も同、1)</p>	<p>火の元用心(1) 女が草薙みに行く際、人の通詰禁止(4)</p>		<p>郷村若木立の中で松木切株細取禁止(2) 持主に相談なく松木切株細取、由木並しの禁止(3) 7年以前の申渡通り、川筋・堤防・土手の出取つた所は引つ込め、川よし等を植付け、他人の迷惑になる所は雪月中に切り取る(4) 屋敷内又は田畑の里に植えた木で、影になるものは切り除く(5)</p>

① 天保2.13「持読」	「嘉永4.2」付定儀約之ヲ条」
祭物はなるべく手作りのものを使用 (6)	
焼酎の酒は祝言時のみ、後で酒客を呼ぶこと禁止 (2) 奉送の際の酒買 I ①Hに同 (3) 奉送の際野辺送り道具持えの人へは家内で酒振舞 (4) 奉送の際他村より礼舞の人へは表口で一通り酒を出すのみ (5)	焼酎屋禁止二付、3月氏神酉祭礼・4月5日出口水神・戸隠山御湯立・ 林園社建立・岡社氏神夏祭礼時の神酒は是迄通り (1～4) 短歌二付神上ケの際酒禁止、甘酒は可、客も近親・隣家のみ (5・6)
屋作・歳昔詣の見舞 H9に同 (9)	
煎餅はなるべく用いず、煎油を代りに使い、秋の豊稔時に大山嶽の災・ 五味子などを煮た油にし用いる (8) 年内休日はなるべく減らす (7)	1～4条の祭日時には村中男女農作業禁止 (4) 上下郷山は小作に出し、人土木を取る (7) 林坑園祭礼の松木の炭を切ることを禁止 (8) 祭場の石碑をこぼはすことを禁止(9)

各項末の数字は（ ）内の箇条の番号を示す、出典は表5参照

統一を図り、祝儀・不幸時には領主触に優越して絹布の着用を許可するところに、村側の独自性がみられる。また染色・傘・腰物・下駄など多岐にわたり「分限相應」の文言がみられ、村内での地位に応じた衣類着用が強調されているのも注目されよう。個々の百姓の衣服の乱れに現れる村内秩序の乱れへの、村役人グループの対応と評価しておきたい。

## 2. 祝儀・振舞・不幸

村定では親子以外の振舞・呼合禁止、「重（＝折詰）二而くばり候」の禁止が一貫して定められ、茶振舞の規制などの個々の条項がそれに付随している。これに対し領主触は音信・贈答規制（表6い・と）、婚礼・祝儀時の客呼・食事の規制（ろ・は・ほ・と）を定めており、村定は領主触を受けてはいるが、親子以外の振舞禁止の条項が、領主触に関係なく繰り返し出されているのが注目される。村内の各家との交際を平等に行わなければならない当時の村では、一軒への新規の振舞が他軒へも拡大せざるをえず、その出費が際限なく増えることへの対策と考えられ、その点で村方独自の条項といえよう。

## 3. 飲酒

村定では平時には禁酒が一貫した基調であり、村外の酒商人からの購入を特に厳しく規制している。また、祝儀・不幸の際には酒の購入そのものは許可されているが、村役人の承認を必要とし、G以降は事前に組頭・親類・隣家による購入量決定の事項が加わっている。またその際家内での飲酒が強調されているが、これは後でとりあげる史料3の37条にみられるような、不幸時の客への振舞酒が酒宴へ転化することを防ぐためと考えられる。

また、農閑余業としての村内の揚酒屋営業についても、天保年間以降村内への酒売買禁止、営業停止と規制が強化されている。後で検討する史料5では、天保一三年（一八四二）四月に、居酒・売酒禁止を誓約した一札が揚酒屋四名から村役人に提出されており、村定が実際に効力をもったことが分かる。

これに対し領主触は、表6ろで酒盛禁止を定めているものの、禁酒条項はほまでみられず、とに至りようやく、婚礼・葬送以外五年間飲酒禁止、揚酒屋・居酒屋禁止と体系的な規制を行っている。しかしこうした条項はそれ以前の村定にすでに存在しており、村定の飲酒条項は村方独自の課題と考えられよう。当時の村方への詫び証文に多数現れ

る、飲酒による不祥事の発生と村落秩序の乱れが、それに当たるものと思われる。

#### 4. 若者

領主触は踊り・相撲の費用節減、新規の燈籠禁止、歌舞伎・狂言・あやつり物・物真似の興業禁止など、若者組が中心となつて行ふ祭礼の規制を定めるのみであり、若者組に対する本格的な規制は嘉永五年（一八五二）の若者組禁止令までみられない。<sup>14</sup>これに對し村定では若者の夜遊び・宿泊、休日の往来での雑談といった平時の行為自体が問題とされており、領主触とは異なる独自の内容である。

#### 5. 家作

領主触が家作の規模・造作の規制を定めているのに對し、村定で問題とされたのは普請時の手伝人足への振舞の際、その出費がかさむことであり、振舞の供応を目的とする「押懸手伝」の者の一般化という状況に對した独自の内容と考えられる。

#### 6. その他

各種の講に関する規制、食事についての条項、村落生活にかかわる種々雑多な規制であり、二で検討する「村談之覺」の大部分を占める諸事生活規制条項に受け継がれるか、あるいはその再令・補完である。

以上の検討から、当村の儉約村定は、

- ・領主触の再令及び細則である衣服
- ・領主触を受けてはいるが、村方独自の課題に基づく祝儀・振舞・不幸、飲酒
- ・領主触と村定で内容の異なる家作・若者

の三つを中心とし、「村談之覺」の再令・補完であるその他から構成されているといえよう。衣服・祭礼・祝儀不

幸・飲酒・家作・博奕禁止の五点に絞られる領主の儉約触<sup>(15)</sup>と比較して、儉約村定はより広範な内容を持ち、領主触が禁止する絹布の着用を「内々」ではあれ許可していることに示されるように、領主触に対し自律性を保持している。ここから、村方独自の課題に対応した自律的な生活規範として、儉約村定を位置付けうるのではないだろうか。他地域でも、たとえば前田正治が紹介した文政一〇年（二八二七）の丹後国熊野郡久美浜村の儉約村定には、「儉約与申儀八家内取締方ニ可有之事ニ候間」との文言がみられ、<sup>(17)</sup>個々の百姓にとつての生活規範という儉約村定の性格を裏付けているのである。

## 二 「毎年宗門内改之節申渡村談之覚」について

次に、村—百姓間の関係について、当村の基本法として文政初年に確立した「毎年宗門内改之節申渡村談之覚」（以下「村談之覚」と略す）を取り上げ検討する。

### （一）寛政—文化年間の乙事村

「はじめに」でふれたように、当村では寛政年間を画期とする村定の変化がみられるが、その背景となる当時の村方の状況について述べておこう。まず経済構造については、当時期の水田の大幅な増加により、二—五石の中層農民が村内の主力を占めるようになった（表1・3参照）。

次に村役人制については、寛政末年頃の当役・古役の村役人グループの確立と前後して、寛政八年（一七九六）には本名主の半年交代および村方独自の増給が、また文化七年（二八一〇）には村方独自の増給が再び行われ、村役人就任期間中のその生計保障が図られている。<sup>(18)</sup>

表 8 乙事村の村内職制 (天保初年)

名 称	人数
立場川水番世話人	1
中丸沢・大久保汐世話人	2
うらなし・林尻堤番	3
郷田世話人	1 3
郷田水見	3
一之宮日参世話人	1
若者頭	4
火之番大頭	4
同 總頭	4

天保 2 年正月「従古来村方仕来書上帳」(乙事区有文書)より作成

文書は名主の回り持ちとなった。<sup>(19)</sup>

このように当時の乙事村は、村民の経済力の充実・安定化を背景として、村役人グループによる村落運営システムが整備された時期に当たると見られる。その結果、文化六年に村の治りが良いとして、当役・古役・世話役・惣百姓が領主から褒賞を受けたのである。<sup>(20)</sup>

## (二)「村談之覚」の検討

### 1. 成立の経緯

この村定には、三つの異なるテキストが存在する。

a 年月日未詳「年々御宗門内改之節申渡村中議定之覚」全三二条

b 文化一二年三月「村談申渡 乙事村当役人・古役人・世話役」全四〇条

近世中後期の村落と村定(富善)

また寛政四年及び八年には、当村の西北を流れる立場川からの堰(「用水路」)開通に伴い、村内でも同一〇年六月には中丸沢から乙骨沢に至る全七町の新堰が完成するなどその用水体系が整備され、用水管理に当たる堰惣代が設置された。この外にも、表 8 に示したように村方独自のさまざまな役職が成立しており、その就任者は村役義の一部を免除されている。代々の名主が引き継いできた村方文書に関しても、文化一〇年の帳蔵新設を機に文書整理と目録帳の作成が行われ、非現用文書は帳蔵へ収納され、現用

c年月日未詳「毎年宗門内改之節申渡村談之覺」全四二条

a、cの關係について、細かな検討を省略して結論のみを述べると、先に述べた文化六年の領主による村方褒賞を契機にaが成立し、bでの一ヶ条の追加を経て、文政初年頃条文配列及び文章を変更したcが成立し、定式化されている。また作成主体は、bの表題から、当役・古役・世話役の村役人グループと考えられる。

## 2. 内容の検討

まずこの村定の全文を、長文ではあるが左に掲げる。

【史料3】(番号は引用者が便宜的に付した)

村定

- 1 一宗門御改御条目御読為聞之砌、平伏いたし奉畏入り可申候
- 2 一人別御改之節次第能順々罷出、謹而印形差出可申候、印形江名前札能見江候様附置可申候
- 3 一御改以前二而茂、高声二而雑談・世間之噂咄等仕ル間敷候、猶又垣<sub>を</sub>透見、或ハ遠方二而立詠杯致間敷候
- 4 一髪目代いたし、印形無失念持參可申候、烟草道具ハ決而無用、近所之家江寄事相成不申候、御改場江股引・甲懸・立付等不相成候
- 5 一御上様江対無礼等無之様可仕候、御改之場江不罷出女子・児共<sub>子共</sub>二茂別而申渡、礼義いたし候様常々親<sub>を</sub>教江可申候

- 6 一往還筋者勿論、家内迄茂掃除念入可申候、并ニ御改ニ出候跡留主居之もの、隣家歩キ致間敷候
- 7 一御奉行様御往来之節視見候事不相成、児共たり共遠方茂立居申間敷候
- 8 一第一火之元大切ニ可仕候、ともし火・くわへきせる堅慎可申候

- 9 一御年貢納物随分丁寧拵可申候、年々相触候得共心得違之族相見へ候、以来龜末二拵候者ハ持為返候、并二出繩俵念入拵可申候
- 10 一出シ草鞋之儀者 御上様へ御意有之候事二候間、念入造納可申候、年々組頭中能々相改候筈、再々龜末二拵候者ハ其趣可被申出候
- 11 一諸御役義宛候節無辭退受可申候、若無執訊等有之ハ格別二候、身勝手成儀仕間敷候、右二參候節并当之事、粟・野菜之類を入、何様之龜飯ニ而も持參可仕候、其外農業之節ハ勿論、草刈等も同様之事二候
- 12 一農業専出情可仕候、農着物并笠等之義、前々申置候通成丈ケ儉約可仕候
- 13 一御役儀ニ參候節、不働いたし候者ハ過怠申付候、猶又村普請ニ出候節、成丈相働可申候
- 14 一他所稼致候者、前々も申置候通丁寧ニ相働可申候、尤稼之善惡目付役申付置候間、其旨相心得可申候、稼取候金子ハ不殘親江可相渡候、猶又目立候衣類并腰物等ハ別而不成候、近年繁花之場所を見習ひ、所二不応身形等拵、一村風俗惡敷致候様成族有之、不埒之至二候、随分じみ二いたし可申候、祭杯江參候節相心得可申候
- 15 一他所者勿論、御領分中ニ而も喧嘩等之相手ニ成候者、善惡ニ不拘過怠申付候
- 16 一他所歸り延引之者ハ他所留申付候、前々定之通り盆并年之暮、春ハ正月晦日迄ニ歸村可仕候
- 17 一他所稼先ニ而手慰様之事ニ相加り申間敷旨、前々ハ嚴敷申渡置候事ニ候、此頃如何敷風説有之候、右躰之儀ハ有之間敷義ニ候、此上目付役へ相聞江候得者、他所留いたし候、其親・兄弟・一類心付、後難無之様可仕候
- 18 一揚酒屋ニ而居酒吞候事ハ不相成旨、前々へ申置候所、近來猥ニ相成、肴等拵候而大酒いたし候者も有之趣、甚以不宜儀ニ候、右躰之儀相慎可申候、元來其酒屋ニ而右様之儀為致候筋無之候、此上相止不申候ハ、酒売差留、吞人へハ過料申付候

19 一男女往来ニ立交雜談仕間敷候、人目を憚遠慮可仕候、猶又夜遊び等相慎自身之家ニ罷在、親・兄之詞を守平生心懸、いろはたり共書覚江、十露盤等稽古可致候、年立候而後悔有之事ニ候

20 一前帶・卷帶・壹重帶・打懸手拭等ハ甚以不牒之事ニ候、相心得可申候

21 一若者集候而騒がせ、小宿事抔致候事不相成旨、是迄嚴敷申置候儀候、此上右牀之儀相聞江候得者過怠申付候、并ニ山伏・道心者又ハ乞喰等折々為休、或者宿等決而不相成候、名主所ニ差圖無之留申間敷候

22 一正月道祖神場ニ而、若者并兎共遊び候節おとなしく可仕候

23 一婚禮有之節嫁見ニ參、夜分障子破候様成狼藉成義不相成候

24 一名主所之近辺者物每靜ニ可仕候、祭日抔も其辺ニ立つとひ中間敷候

25 一村役人江對無礼・鹿略仕間敷候、御公儀様ニ御目代ニ御立置被遊候御役ニ候、暫時勤候内ニ而も蔑ニ心得候而者、一村不相納候事ニ候

26 一正月飾松枝松ニいたし度候、然共手前持杯ニ而(生)囃候者ハ格別、併是も随分小松ニ致申度候、此儀ハ御法式も有之由ニ候

27 一萱古来之通、三月晦日迄他村江一切出申間敷候、但村普請相濟候上ハ、組頭江届ケ候而出シ可申候  
但諷有之候而外江遣度者、願出候上可仕候

28 一畑畔萱野六尺通り去可申候、麻蒔候畑並ヒ地ニ外作有之方ハ、三尺通り去可申候、古来如此ニ候

29 一道筋并馬入道迄も、外ヲ伐内を立可申候、格別道狭候所ハ、毎春道普請之節手広ニ切為払候

30 一馬伏場之草一切刈申間敷候、并芝切ケ候事、前々申置候通不相成候

31 一林枯枝吹落拾ヒ候儀、其持主ニ貰候ハ格別、無沙汰ニ入り申間敷候、猥ニ不法之事致候者ハ、見聞次第急度詮

義申付候

32 一村・他村、田畑・林・萱野共売買之節、無間違双方に帳面囲可申出候、等閑に致置、後年二至出入等二不相成様相心得可申候

33 一田畑・林・萱野之中二有之石、地主江相對茂無之取候事以來不相成、山手御上納仕候得ハ、斷無之入候筈無之儀二候、作物を踏荒、林之若木・苗木等を損、石こつば取散置候事不埒二候、尤大石・小石とも同様之事二候

34 一畑・林・草場之中江、猥二新道踏付候事不相成候

35 一新家建候儀、古代ハ、御上様江奉願上、誰と申者之跡式相立度筋を以願上候上、家作致候事二候所、近来穩力二相成候故、手前々々勝手次第之様二成行、畑・林等江致家作、並地面持主江懸合も無之猥二樹木等植付、或者風垣等ヲ拵、作物之障二相成ル事をも不弁、不筋至極二候、此上者並地主へ相對無心之上、村役所江願出可申候

36 一參宮其外物詣・下向等之節、誤合有之歟最寄等ハ格別、其外ハ女中衆無用二候

37 一不幸有之節事済候上礼二參候儀、頼候人ハ格別、一通之宅江ハ見合可然候、且又見舞候茂亭主先、女中ハ跡に參候筋二候、并二葬礼之時節酒振舞候事、其家之内又者家敷内を限り、隣家或者道等江持出候義仕ましく候、猶又酒を吞過シ候而狂談等ハ、其家江對愁歎之察無之、無礼至極二候

38 一愁歎有之節見舞候事實情二可有之、近年見舞方不心得之族有之候、不埒之至二候、人々一生涯一度之義、必疎遠成間敷、并御引導之節ハ下座可仕候

39 一同断之節酒買候事、名主所江届候上可仕候

40 一立場川より揚<sup>(砥損)</sup>□浚普請、近年働方不情二相見江候、此儀者用水・田水共人々身分二引請候事、等閑二可致筈無

之、甚以不宜候、以来前々之通、其当日ニハ日之出ニ朝飯認メ出可申候、遅参之者不働之場ハ仕直シ為致候

41 (破損) □普請・道作等年増等閑ニ成行候事、甚以心得違候、是又古来之通、其当日ニハ日之出ニ朝飯認出可申候、

銘々人馬所用之儀、成丈ケ念入拵候上ニ而、夏ニ至水届キ不申ハ無扨事ニ候、疎成繕致置候而、旱水之節ニ至難渋之様俄ニ申出候儀、其理不相当候

42 一右普請之節自身ハ錢取之方江出、極老人又ハ小供を村役儀ニ出シ、或者他村ハ雇・手代り等頼出候事不相成候その内容は、①宗門改(1~7条) ②村役(13・40~42条) ③貢租・課役(9~11・13条) ④若者(19・21~23条) ⑤女性(19・36・37条) ⑥他所稼(14・16・17条) ⑦村役人(24・25条) ⑧諸事生活規制(それ以外)の七項に区分できる。以下各項について検討しよう。

#### ①宗門改

改場での心得(宗門人別帳前書読み聞かせの際平伏、順番を守る、高声雑談・世間の噂話・遠見・立ち眺めなどの無作法禁止、髪は月代をそり煙草道具は持参しない、近所の家立ち寄り禁止、衣服の規制)、領主への態度(女・子供に至るまで無礼禁止)、留守の者心得(道筋・家内まで掃除念入れ、宗門奉行通行時の覗き見禁止)からなる。本史料が領主の宗門改の前日の村方独自の内改の際各軒に申し渡す心得書であることを反映し、詳細かつ実態に即したものである。

#### ②村役

立場堰・村内の堰・道の三種の普請という、村民の生産・生活を維持するために不可欠な労働負担について、近年等閑にされ働方が不精であることを指摘し、当日は日の出時には朝食を済ませ普請に出ること、遅参・不働の者にはやり直しをさせるという作業の心得を定めている。「用水・田水共人々身分ニ引請申候事等閑ニ可致筋無之」(40条)、

「疎成繕致置候而旱水之節二至難決之様俄ニ申出候儀其理不相当候」(41条)と、これらの普請が個々の百姓の生産に直結することが強調されているのは、村民の生産・生活を維持するための負担という村役義の性格を端的に示すものであり、注目される。しかし領主役との関係については、領主役に出た際不働の者は過怠の制裁を受けるのに対し、村役に対しては「成丈」と作業出情を要求するのみであり制裁規定を欠くことから(13条)、村役を領主役と同等のものとして評価する水本邦彦の見解には疑問が残る。また42条は、個々の家にとつて現金収入をもたらす稼ぎの比重が上昇し、成年の当主が本来勤めるべき村役を、老人・子供あるいは他村の者に代替させるといふ、個々の家と村との利害対立の顕在化への対応と考えられ、注目される。

### ③貢租・課役

年貢の梱包は丁寧に行うこと(粗末なものは返却)、出し縄俵・草鞋の組頭による検品、伝馬・川除人足などの領主役に宛てられた際の辞退禁止及び弁当の心得、不働の者過怠の規定からなり、おおむね個々の領主法を受けたものである。

### ④若者

若者を集め宿をする者には、「過怠」と厳しい制裁を定めているが(21条)、若者の行為に関しては、「遠慮」「相慎」(19条)、「おとなしく可仕」(21条)と、それ自体を直接禁止してはいないのが注目される。つまり正月の道祖神場での遊び・婚礼の際の嫁見<sup>(22)</sup>といった若者の習俗を、村役人グループも認めざるを得なかったことを示すものであり、天保三年(一八三二)の下村若者組狂言一件<sup>(23)</sup>にみられる若者組の自律性を考慮したものと考えられる。

### ⑤女性

雑談規制にみられる男女の別の強調(19条)、参宮・物詣・下向の女性のみの禁止(36条)、不幸の際の見舞の順は

亭主が先、妻は後（37条）にみられるように、女性は男性に比して一段と低い地位に置かれていたことがわかる。

#### ⑥他所稼

働方出情、稼ぎの善悪目付役設置、稼ぎの収入は全額親へ渡す、目立つ衣類・腰物禁止（14条）、帰村の時期及び遅刻の者の他所出差止（16条）、他所稼ぎ先での「手慰」（＝遊芸）に加わることの禁止、違反者は他所留の制裁（17条）からなるが、「近年繁花之場所を見習ひ所二不応見形等拵、一村風俗悪敷致候様成族有之」（14条）と、江戸・甲府といった稼ぎ先の都市の風俗の持ち込みによる村内風紀の悪化への対応が、その基調をなしている。

#### ⑦村役人

名主宅の近くでは静かにすること（24条）、村役人への無礼・鹿略禁止（25条）を定めており、「暫時勤候内」（25条）の語にみられるように、当時の村役人の頻繁な交代を背景としたものである。<sup>(24)</sup> また25条では村役人自身を「御公儀様御目代二御立被遊候御役」すなわち領主の代理として規定しているが、これは当時期の小前百姓の村政批判・郷林の勝手な伐採に対し、村役人と小前との差異を再確認せざるをえないような状況の下で、<sup>(25)</sup> 領主の威光を背景とした小前百姓との関係の定式化を行ったものと考えられ、百姓に対する村定というこの史料の性格を明瞭に示している。

#### ⑧諸事生活規制

この村定の最大の特徴は、村落生活に関する種々雑多な条項であり、量的にも全体の四割近くを占めている。個々の箇条の説明は紙幅の関係上省略するが、一で検討した儉約村定と類似したものが多いことを指摘しておく（表7参照）。このうち8・12・26・35の各条は領主触の系列か、あるいはその影響を受けたものであるが（表6参照）、他の箇条は村方独自の規制である。他人の葬式にかこつけて酒の振舞場所に押しかけ、「狂談」と愁歎の場を酒宴に転換

させてしまうような（37条）当時期の村落秩序の乱れに対し、その維持を図ろうとする村役人グループの対応の現われと考えられる。

また35条は、樹木・防風垣の植付主と、その影により農業に支障が生ずる隣の者との対立を背景としたものである。こうした種々の契機での百姓間の紛争発生に対し、隣の者との相談→村役人への願い出という紛争解決のルールがこの箇条で提示されている。個々の百姓にとって、こうした相互の紛争の解決こそが、村役人グループに求めたものであり、それゆえこの村定は現実性をもったと考えられる。

以上の検討から、

①個々の家から若者組に至るまでの、村内の種々の集団相互間、あるいは村役人との利害対立・紛争の存在を前提とし、それを解決するためのさまざまな条項

②村落秩序の乱れに対し村役人グループが提示した、詳細かつ教諭的な条文

の二点が、この村定の特徴と考えられ、故にこの村定は村—百姓間で機能するものと位置付けられる。

### 3. 村での運用実態

次に、この村定の運用について述べたい。まず全体としての運用については、毎年三月の宗門人別改の前日に、村内の百姓全員を集めて、村方独自の内改が行われるが、その際当役・古役によりこの村定が読み聞かされた。当村では百姓全員が集まる村寄合はこの宗門内改しかないと、村方の基本法としてこの村定が位置付けられていることが分かる。また史料<sup>3</sup>では煩雑になるため記さなかったが、この村定には漢字の部分全てに振り仮名が付されており、その識字能力の有無に関係なく、村役人の誰もが読み聞かせることが可能なのであり、この村定が実際に毎年使用されたことを裏付けている。

次に個々の条文の運用について、16条を取り上げ検討する。左に史料を掲げる。

【史料4】

丙子三月十日名主四郎右衛門前ニおゐて当役・古役相談之上、古来より他所稼ニ罷出年越し致度者ハ、例年御湯立翌朝願為出候所、右牀ニ而ハ稼先取極メ不為之族も有之趣粗相聞候ニ付、<sup>(破損)</sup>□方<sup>(破損)</sup>も稼方之義、尚亦町実成者も有之儀ニ付、当年より三ヶ年之内、年頭帰宅之義翌春二月晦日迄延引為致筈相定申候間、<sup>(破損)</sup>□<sup>(破損)</sup>□<sup>(破損)</sup>、乍然不身持・不心得之者者、是迄之通年越ニ急度可罷帰筈、組頭中江申渡

(bの表紙見返し)

この史料によれば、他所稼の者の益・年暮・正月晦日の帰村を定めたこの条項は、稼ぎ先の決まらない者の発生という状況により、文化一三年から三年間その適用を免除されており、この村定が、年々変化する周囲の状況に対応して弾力的な運用が可能なるものであることを示している。

またaからcに至るテキストの改編・箇条の追加には、当時の村方の状況が反映されている。たとえば史料3の35条は、文化一五年（一八一八）正月付けの当役・古役相談による村方への申渡の内容と同一である。「尤屋敷請にも無之畑抔へ家作致候事ハ勿論御停止之所、近來猥りニ相成候ニ付」との前置の記載から、この申渡が屋敷地として名請していない畑への新規の家作建築に対し行われたことが分かるが、これが史料3に組み込まれたことから、この村定が村方の状況に応じて改編しうることを示されている。

最後に実際の適用例として、文政二年（一八一九）六月一七日に起きた隣村の小六新田との争論があげられる。これは当村の五左衛門他八名が、小六新田道祖神前の塞の神竿を「乗打」（乗馬）のまま踏み越したことから、同新田の者多数と喧嘩に及んだ際、村役人がこれを糾したところ、五左衛門は「此趣早速名主所江可申出筋之所、兼々村方

江申付之村法喧嘩口論いたし候者ハ村方過怠有之所」と答えている。<sup>(27)</sup> また文化一二年（一八一五）七月一五日、当村の若者八名が隣村の瀬沢新田の若者四名との喧嘩が起こったが、その際当事者の鶴松外七名は、「村法」として錢五〇〇文及び三〇〇文の制裁を受けている。<sup>(28)</sup> これは15条（他所・領内とも喧嘩は善悪にかかわらず過怠申付）が個々の百姓に現実に意識され、過料錢の形で実際に適用されたことを示しており、従来村法の自主性のメルクマールとされてきた村制裁の点からも、この村定が効力をもったことは明瞭である。

以上三項にわたり、「村談之覚」の性格を検討してきた。従来このような長文の村定は、幕府の村落支配の基調である五人組帳前書との内容の類似から、領主の取締規定たる「村方取締議定書」として評価されてきた。しかし右の検討から、こうした村定は、村あるいは村役人グループが自主的に定めた村方の基本法として位置付けられるのではなからうか。また小前百姓にとっても、成文村法による村落運営という点において、かれらの要求を一定程度反映しつつ、また村役人の恣意的な村落運営に対する抵抗の根拠ともなりうることから、それを近世中後期の村落自治のひとつの達成として評価しうるのである。<sup>(29)</sup>

### むすびにかえて

最後に、本稿のまとめと若干の展望を行っておきたい。

第一は、村定における領主―村―百姓三者の関係についてである。領主―村関係において、領主は村定を領主法の細則およびその効力貫徹手段として利用し、風俗統制・治安維持を図った。村は領主の意向を受け村定を制定したが、その内容は村方独自の課題に基づく生活規範であり、領主に対し一定の自律性を保持した。

一方、村―百姓間では、村定は村落運営集団としての村役人グループと、個々の百姓・村内外の諸集団との矛盾・

対抗関係に規定され、相互の力関係によりその内容が左右されると考えられる。ゆえに村定が三者の関係の中でのいかなる位置にあり、どのような機能を果たしているかについての検討抜きに、村定の性格を論じるのは早計だと思われる。

第二に、当村における近世中後期の村定の構造については、本稿での検討から、

①村方の基本法としての「村談之覚」

②生活規範としての儉約村定

の両者が村方での生活規範として機能し、

③その時々状況に応じて出される村政運営上の細則的な村定が付属するという三層構造をなすまとめられる。①②は各地域の中後期の村方文書に一般的にみられることから、この構造は全国的にもある程度一般化しうろと思われる。

また、本稿では独立の文書をなしている村定のみを扱ったが、代々の名主に引き継がれる会所書留帳に記された村定や、個別の事項にかかわる文書中の村定をも含め、文章化された村レベルの意志決定という観点から村定を検討すること、すなわち当該期の村落運営システムの一環として村定を位置付けることが必要であり、今後の課題としたい。最後に、幕末・維新期の展望について述べておきたい。先にも述べたように、村定は村役人グループと個々の百姓・村内外の諸集団との力関係に左右されるものであり、後者の自律性や個別利害が顕在化すると、その効力は低下する。それを示す史料を掲げる。

【史料5】<sup>30)</sup>

(4月23日条)

一揚酒屋之儀宗門之節留置候所、先達而酒屋四人内々願出之儀申談事仕候所、四人申候者、酒売不申候而者酒屋二

而ハ貸而ハくれず故誠ニこまり入候而、何卒他村売致度、村内江者書付ヲ出シ候而も売不申候と申故、右者御頭中(ママ)願出之儀ニ候得者、御相談之上御返事申度候、組頭申候者、四人めいはくニ相成候而も留申と言義ニ候而も宜不、何レ他所・他村之者たり共居酒之儀嚴敷留度候、先御当役中ニ而宜敷御相談之段奉願上候

(24日条)

揚酒屋四人之衆ヲ呼申候者、先達而内々願出之儀段々談事仕候得共何分不定候所、今度組頭衆へも懸合候處、村内者一向不売他村売者格別、尚又祝儀・しうたんハ其人と之相談、(隣)隣村・他所・遠国之人たりとも居酒一向不相成候、若右躰之事役人・組頭之耳ニ入聞イ、又者目ニ懸リ候事有之候者、其節直ニ相止可申候筈之書付申受度候と申渡ス

一

藤 作

七 蔵

庄之助

勝 吉

差上申一札之御事

此度村御定ニ付、御札受売酒御差留被遊候處奉畏、此以後村内江居酒者勿論売酒堅不仕候、心得違之者名面之内ニ而居酒・売酒仕候ハ、御咎被下候共少も申分無之候、尤他村江売物仕候義ハ御札御運上之儀旁ニ付願上、御免之上売酒仕候、右前文之通相違無御座候、以上

この史料によると、宗門内改の際村役人が申し渡した揚酒屋営業停止の決定は、それにより生計が維持できなくなるといふ酒屋四名の訴えにより、組頭との協議を経て、村内の者へは居酒・売酒を行わないと旨の一札を酒屋が村役人に提出することで、村外には適用されなくなったことが分かる。これと同様に村定の禁酒条項は酒屋の個別利害の

前に形骸化し、その効力を失ったのではないだろうか。表4によると幕末期には村定がほとんどみられないが、それは村役人グループにより村民に提示された生活規範としての村定が、個々の家や村内外の諸集団の個別利害の顕在化により、当時期に至りその役割を終えたことを示している。山中永之佑は、近代以降の村規約が「甚しく生彩に乏しい事務的なもの」となることを論じているが、それはこのような村における村定の意義減少を前提として、はじめて説得力をもつと思われる。この外にも、村方騒動や村内の階層性と村定の関係については美濃の頭百姓制・丹波の五苗制など多くの研究があるが、それらとの関連については今後の課題として、本稿を終えることとしたい。<sup>(32)</sup>

## 注

- (1) 前者は有斐閣、一九五〇年。後者は名古屋大学「法政論集」一八・一九、一九六一・六二年。なお大出論文では前田正治をはじめ、熊谷開作・原田敏丸・染野義信・石井良助・小早川欣吾など、法制史を中心に一九五〇年代までの研究史整理が行われており、本稿で検討できなかった法制史側の個々の論者の見解についてはこれを参照されたい。

- (2) 前者は「史学雑誌」六〇―九、一九五一年。後者は「民衆史研究」九、一九七一年。なおこれを以下上杉論文と略す。

- (3) 木鐸社、一九七四年。

- (4) 前者は「日本の社会史」第五卷、岩波書店、一九八六年（後に同著「近世の郷村自治と行政」東京大学出版会、一九九三年、に所収）。後者は「神戸大学文化学年報」五、一九八六年。また落合延孝は盗みに関する村の検断権及び自主的村法の存在を認め、犯人摘発のため行われた入札をめぐる村役人と小前百姓との対抗関係を検討している（「近世村落における火事・盗みの検断権と神判の機能」『歴史評論』四四二、一九八七年）。

- (5) 「近世農民の罪と罰―近世村法研究序説―」（『中央史学』一三、一九九〇年）。「領主法と村法―領主の村法認識をめぐって―」（『中央大学大学院研究年報（文学研究科）』二〇、一九九〇年）。「相模国の村法」（『大和市史研究』一六、

一九九〇年。「上野国の村法」【群馬文化】二二五、一九

九一年。「武蔵国の村法」【多摩のあゆみ】六五、一九九

一年。「農民の日記から見た村法制定過程」【社会文化史

学】二九、一九九二年。「江戸時代の海老名(五)——海老

名とその隣接地域の村法について——「えびなの歴史」七、

一九九五年。またこの外に村定を論じた近年の研究として、

阿久津宗二「村議定についての一考察——特に制裁定

めの諸事例——」【群馬県史研究】二五、一九八七年、中村

昭一「相模原における村定め——近世・近代の村定め資料

——」【相模原図書館古文書室紀要】一四、一九九一年、阿

部俊夫「一七世紀後半会津郡界村の村運営——「公儀」の

法と村掟との関係をめぐって——」【福島県歴史資料館研究

紀要】一三、一九九一年、をあげておく。

(6) 上杉論文八九頁。

(7) なお乙事村及び富士見町域の概要については、「富士見町

史 上巻」、一九九一年、をも参照されたい。

(8) たとえば天保一三年(一八四二)の名主引継帳には、大

工五・木挽一・車屋(水車屋)一・桶屋一・馬喰四・鍋

売一・揚酒屋四・店売四・棒手振二・中馬二名の計二五

名が記載されているにすぎない(同年正月晦日「名主替

二付諸事書送帳」富士見町乙事 五味甫家文書)。

(9) 一例をあげると、文政八年(一八二五)の凶作時に領主

は大検見を行い、田方三二〇石八斗六升の減免を行った

が、その際の減免率は上村八分半・下村三分半であった

(年未詳「乙事村万代記」富士見町富士見 五味哲夫家文

書)。

(10) 本争論は、上村が下村に無断で上社の普請を行い、下村

もそれに対抗して下社の宮細工を始めたことを、上村側

が「新宮としてをこりの沙汰」であり、下社を大規模に

して上社より優位に立とうとするものと抗議したもので

あり、同年九月八日、宮普請・神事祭礼を従来通り両者

相談の上行う旨の証文を取り交わし落着した(延享二年

「覚書之事」乙事区作成「乙事諏訪社について」上巻、一

九五七年)。なおその背景には、耕地の高低の相違による

下村の経済力の優越が存在したようである。

(11) 「富士見町史上巻史料編」一〇四号史料。

(12) 文政六年組頭新五兵衛は「五人組死亡又者幼少・後家等

二而家軒不足」ことを当役・古役に願ひ、他組から五名

が新たに加えられたことはその一例である(文政二年七

月「名主所日記」)。

(13) 当村の村役人制の変化と村落構造及び村政運営との関連については別稿を予定している。なお拙稿「近世中後期における村役人制の実証的検討―信州高島領乙事村の事例から―(報告要旨)」『関東近世史研究』三一、一九九一年、を参照されたい。

(14) 『長野県史・近世史料編第三巻諏訪地方』五七六頁。なおこの触以後も若者組は存在し続けており、その効果はほとんどなかったと考えられる。

(15) 博奕禁止は表6にみられるように繰り返し布達されているが、村定では宝暦三年(一七五三)正月三日付の「村中江申渡法度判形帳」(表4―No.16)に、博奕禁止及び本人・宿・銭元に対する制裁規定があるのみである。

(16) 領主の儉約触については、近年山本英二が「儀礼的な贈答慣行を廃止するのではなく、あくまで身分相応の経済的消費を求めるものであり、いつてみれば身分支配強化法としての機能をもっていた」との評価を行っており、「(甲斐国「浪人」の意識と行動)『歴史学研究』六一三、一九九〇年」、筆者もそれに従いたい。

(17) 前田前掲書付録『村法集』一二七号史料。

(18) 寛政八年十一月「村定之事」、文化七年三月二四日「役人

世話役増給談義定帳」。前者は領主からの給分、年貢上納の際村方からの現物支給分、元文二年(一七三七)の増給分の名主への配分方法の規定に加え、名主二名へ金二両、年寄四名へ金一分宛を村方から新規に支給し、後者は出作百姓の物成一升に付銭一文、山手大豆(林年貢)一升到付二文掛けで徴収した銭一二貫三〇七文を名主二名に等分し、また村内田畑の物成一升到付二文掛けで徴収した銭二貫三九七文のうち金二両を年寄四名に二分宛配分し、残りを出物金(名主元臨時入用費)とすることを定めたものである。

(19) 拙稿「近世村落における文書整理・管理について―信州高島領乙事村の事例から―」『記録と史料』二、一九九一年。

(20) 文化六年八月「御殿様御褒美頂戴仕候二付諸事書留帳」。同月六日には郡方役所で「御書付」(褒賞状)・御酒・御吸物が下され、八日には村方で御礼祭が行われた。また褒賞に先立ち、「古来村方仕来之箇条」(全三八条、表4―No.35)が作成され領主に提出されたが、以下検討する「村談之覚」と比較すると、村方仕来の報告が大部分を占め、領主―村間で機能する村定と考えられる。

(21) 同著『近世の村社会と国家』（東京大学出版会、一九八七年）一九五―九九頁。

(22) 嫁見について柳田国男は「他所から来る花嫁も平穩には迎えられなかった。嫁見と称して衣装を出させてみたり、または障子を明けさせて正面から批判をしたりした」〔明治大正史世相編〕下巻四八頁、講談社学術文庫」と述べており、若者組による婚姻儀礼の一種と考えられる。なお婚姻儀礼と若者組との関連については、米崎清実「近世後期の婚姻慣行と村社会」〔関東近世史研究〕二二、一九八七年、を参照されたい。

(23) 当一件は、天保元年（一八三〇）に出された領主高島藩の村芝居禁止令に伴う厳しい取締の中で行われた下村若者組の狂言の発覚に際し、領主の処罰を狂言を行った当人八名に限定しようとする村役人と、上村若者組の同様の行為を藩役所に報告しないというその不公平な処置を糾弾する下村若者組との争論である。その過程で下村若者組は、若者寄合・組中寄合の二段階の寄合によりその意志統一を図り、村役人との直接交渉を行い上村若者組へも過料金の制裁を行わせている。その詳細については、拙稿「天保三年信州高島領乙事村下村若者組狂言一件に

ついて」〔論集きんせい〕一三、一九九一年、を参照されたい。

(24) 当時期よりやや前であるが、文化二年（一八〇五）から六年までの五年間に四〇名もの村役人の交代がみられる。一例をあげると、佐兵衛は文化六年七月一日に年寄役に就任したが、「近年御高増家軒等多罷成御用繁勤兼候故、談之上年寄江年内宅分、名主へ宅岡増候得共、米大豆二而五斗六升切故、別而老人手間等之者ハ何分勤兼退役仕候段申上、同月二十七日に退役している（文化二年八月「役人抜替書留帳」、同七年三月二十四日「役人世話役増給談義定帳」）。

(25) 文化九年四月、郷林及び道筋の木の勝手な伐採、村役人への「影言」、批判を小前百姓が行ったが、これに対し村役人グループは組頭三名を罷免する一方、五人組毎に「御上様御定法并村定之儀少も不相背急度相守可申候」と小前から組頭に宛てた印形帳を取り、その上で組頭全員に、村役人就任・退役時の村中の礼参り、願い事は組頭を通して申し出ること、他所稼ぎの者婦村時の村役人への届け、村役人への乗打禁止など全一五ヶ条の村定の遵守を誓約させている（文化九年四月二六日「村中議定印

形帳」。村役人と小前との上下関係を明確化し、また小前―組頭―村役人という意志伝達ルートの再確認を図ったものと評価しておきたい。

(26) 享和元年八月一日「会所諸用日記帳」。

(27) 文政二年六月「草刈争論一件書留帳」。

(28) 文化二年七月一九日「若者一統江申渡覚」。なお当一件に関しては注(23)拙稿を参照された。

(29) これに関連して近年阿部昭は、近世中期以降の村方騒動の結果「年貢・村入用の算用にかかわる庶務規程ともいうべき制度の改善策がとられ(中略)村役人の経理を中心とし、一般事務をも含む事務取扱い規程とも呼ぶべき村法の成立をみる」ことを「村方騒動を通して村落自治が達成した成果」と評価しており(『近世村落の変質』『日本村落史講座』第七巻、一九九〇年、雄山閣出版)、本稿での検討結果と共通する点が多い。

(30) 天保二三年二月一日「当座帳」富士見町乙事 五味甫家文書。

(31) 山中前掲書九八頁。

(32) 前者は伊藤忠士「一八世紀末における村方騒動と村落支配―美濃における一村の分析―」宝月圭吾先生還暦記念

会編『日本社会経済史研究 近世編』、吉川弘文館、一九七〇年。後者は井ヶ田良治『近世村落の身分構造』、国書刊行会、一九八四年。

#### 〈付記〉

本稿は一九九五年六月に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した博士学位申請論文(甲)「近世中後期の地域社会と村政―文書管理史の視点から―」の第二章第二節を加筆修正して成稿したものである。成稿にあたっては歴史学研究会近世史部会の諸氏から貴重な御意見をいただいた。また史料閲覧・利用に際しては、富士見研究会・富士見町教育委員会及び乙事区の方々に大変御世話になった。記して謝意を表したい。

なお本稿は平成七年度文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)「近世・近代期の地域社会と村落行政―文書管理史の視点から―」の成果の一部である。

